

批評と紹介

イーサ・ブルーミ著

末期オスマン帝国再考：

アルバニア・イエメン比較社会政治史、1878—1918

藤 波 伸 嘉

東
洋
学
報

バルカン、イラク、そしてパレスチナなど、現在、旧オスマン帝国領各地域に生起する諸問題の本質、その起源を考えるに当たり、オスマン帝国、特にその最末期の動向に目を向けることの必要は広く認識されている。一方、帝国の「辺境」と見做されるこれら各地域は、帝国の統治システムの特性それ自体を考える上でも重要な視座を提供する。末期オスマン史研究者、当該各地域の20世紀史を扱う歴史家の双方が上記各地域における「オスマン帝国の遺産」に注目するのも故なしとしない。

オスマン語は当然のこと、アルバニア語、アラビア語、そして英仏独伊の西洋諸語をも駆使し、各言語の文書史料、刊行史料を渉猟した著者がアルバニアとイエメンという帝国の二つの「辺境」を論じた本書もまた、上述の問題関心に基づく研究の一環に含むことができよう。だが題名の示す通り、本書は単に一アルバニア、一イエメンに限定された「地域史」には留まらない。それは末期オスマン帝国の全体を再考せんとする試みであると共に、オスマン帝国を同時代の他国家と比較することにより、一般にオスマン帝国の事例を除外しがちな帝国論、帝国主義論を補完し、19世紀ヨーロッパにおけるナショナリズム、帝国主義に対する理解を深めようとする野心的な試みでもある (pp. 17, 21)。

本書は十章から成る。当然、各章は互いに連関し合っているが、元来が論文集である本書では個々の章の独立性も高く、読者は関心を持つ章を一つ一つ完結した論文として読むことも可能であろう。その構成は次のようなものである。

緒言

第一章「序説 国家による隠蔽：末期オスマン社会再考、バルカンとアラビア」(Introduction. Blinded by the State: Revisiting Late Ottoman Social History in the Balkans and Arabia)

第八十七卷

二三八

第二章「本棚に見出す社会史：アルバニア・バルカン研究における社会学的範疇の横暴」(Finding Social History on the Bookshelf: The Tyranny of Sociological Categories in Studies on Albanians and Balkans)

第三章「部族病理学再考、国家の視線を超えるイエメンの宣告なき動態」と (Redefining Tribal Pathologies, Yemen's undeclared Dynamic beyond the Gaze of the State)

第四章「南部国境に異状あり：イエメンの社会序列とオスマン国家の役割、1911-1918」(All was not Quiet on the Southern Front: Yemen's Social Hierarchies and the Role of the Ottoman State, 1911-1918)

第五章「アルバニア史の周縁を理解する：オスマン帝国辺境の諸共同体」(Understanding the Margins of Albanian History: Communities on the Edges of the Ottoman Empire)

第六章「国家に反抗し、国家を定義する：マナストゥル・ヤンヤ両州教育改革と地方政治、1878-1912」(Defying the State and Defining the State: Local Politics in Educational Reform in the Vilayets of Manastir and Yanya, 1878-1912)

第七章「スイスにオスマン・アルバニア人ディアスポラの断片化したアイデンティティを探索する、1899-1920年」(Locating Fragmented Identities in Switzerland's Ottoman-Albanian Diaspora, 1899-1920)

第八章「マレソール・アルバニア人を裸にする：物質文化からの末期オスマン史再考」(Undressing Malësore Albanians: Rewriting Late Ottoman History through its Material Culture)

第九章「アルバニア人ムスリムの目からグローバリゼーションに抵抗する：19世紀の成功と21世紀の失敗」(Resisting Globalization Through the Eyes of Albanian Muslims: Comparing the Successes of the 19th Century to the failures of the 21st)

第十章「分散する忠誠と記憶：アルバニア人軍人と世界大戦」(Divergent Loyalties and Their Memory: Albanian Soldiers in the Great War)

結論

まず各章の内容を簡単に紹介しておきたい。

本書全体の導入部を成す第一章、そしてそれぞれアルバニアとイエメンとに即した議論が展開される第二章、第三章と、最初の三章において、従来の研究史に対する批判と、以降の議論における理論的枠組みとが提示される。それを踏まえた第四章では1911年から第一次世界大戦終結に至る時期のイエメン政治史が扱われ、続く第五章では1878年のベルリン条約以降、1912-13年

のバルカン戦争に至る時期のバルカン史が論じられる。

通史的叙述の体裁が強いこの二章に比し、以降の各章では論点がより絞り込まれる。第六章では帝国の公教育機関とギリシア総主教座の開設する学校との双方に対して現地アルバニア人が示した対応が、第七章では20世紀初頭にスイスに亡命したオスマン・アルバニア人二名が展開した国家構想が論じられる。第八章ではアルバニア高地において衣服及び衣服をめぐる言説に生じた変化の様相が、第九章では現在のコソヴォで「イスラーム」に附与されている意味合いとの比較の許、アブデュルハミト二世治世（1876-1909年、以下「ハミト期」）における公的な「イスラーム」言説に対するアルバニア人の反応が論じられる。最後の第十章では三人の著名なアルバニア人軍人が第一次大戦前後に示した言動が分析される。彼らが時々の利害関係、権力構造に極めて敏感であり、それに応じた政治的言動を選択していたこと、にも拘らず、回顧録作成や自らの対外イメージの形成に当たっては、自らが一貫して「愛国的」であったことを誇示する戦略が看取されること、が示される。

以上が本書の内容の概略である。以下では評者の理解が及ぶ範囲で本書における著者の中心的主張と思われる点を摘記していきたい。

何よりもまず、本書全体を通じて著者が強調するのは、当時には存在しなかった筈の、国民国家中心の思考をオスマン史叙述に投影することの危険性である（p. 12）。通俗的な民族主義史観や国家中心史観の許では、民族主義が高揚した19世紀後半のバルカンにおいて諸民族の独立は自然の勢だったと見做されがちだが、著者はこうした理解を痛烈に批判する。仮に現在では民族＝国民が中心的な行為主体と見做されるとしても、百年前には事態はそうではなかったのであり（p. 15）、現実に帝国が解体する以前には、オスマン帝国の枠組み自体を否定する形で国民国家樹立を求めたアルバニア人はほとんど存在しなかった（pp. 125-126, 190）。

国家を特権的な単位として想定し、他の社会集団の自律性、主体性を等閑視する通俗的発想に強い警告を発する著者が代わって着目するのが、従来の国家中心の歴史叙述では看過されがちであった地方レヴェルの行為主体である。本書がアルバニア及びイエメンを扱う理由も正にそこにあった。即ち、地方レヴェルの行為主体の言動を考察するという課題に際しては、拡張を目指すオスマン国家と「前近代的」（と誤って目されていた）部族社会との境界地域であったこの両地域こそ好適の研究対象となるのだ、と（p. 15）。

だがここで注意すべきは、単一の「アルバニア人」なる実体が存在しなかったのと同様に、その下位区分とされる北部のゲグ族と南部のトスク族という「部族」集団もまた、決して固定的・本質的な存在ではない、ということである。つまり、民族であれ部族であれ、あるいは宗教であれ宗派であれ、こ

の種の範疇を実体視し、あたかもそれによって全てを説明し得るかに考えることの危険性を著者は強調する。如何なる範疇であれ、そこに帰属することが自動的にそこに属する各人の行為の全てを律する訳ではない。実際、「アルバニア人」「ザイド派」などと一括されがちな集団にも、その内部にはそれぞれ独自の利害を持つ様々な行為主体が存在していた。各行為主体が時々々の利害に応じて示す言動は様々であり、部族や宗派の枠を超えた政治的な合従連衡も稀ではなかった。一般にナショナリズム高揚期と見做される19世紀後半、ベルリン条約以降の時期においても、バルカン現地の人々は必ずしも、ムスリム対キリスト教徒、アルバニア人対スラヴ人などという宗派主義的 sectarian 論理に即して行動していた訳ではなかった (p. 93)。列強相互の対立が深まる中、自らの「境界性」を取引材料とすることが可能となったことを、即ち、自分たちが隣接諸国家に、更には国際政治にさえ影響を及ぼし得る立場に置かれたことを自覚するアルバニア地方名士は、時々々の利害に基づき、外部から持ち込まれた宗派主義的論理をも逆手に取りながら行動していたのだった (pp. 86-88)。

ここで興味深いのは、近年盛んに論じられている「オスマン帝国主義 Ottoman Imperialism」とも言うべき帝国中央の政策志向に関する著者の姿勢である⁽¹⁾。著者は、帝国の「国民」形成戦略、帝国主義的政策を論ずる研究の多くが帝国中央の発想を祖述しがちであり (p. 47)、地方の主体性を看過して地方社会を単なる政策対象として取り扱い、当時と同じく現在も存在する通俗的な範疇を無反省に用い続ける傾向にあると批判する (p. 51)。だが実際には、帝国主義的、植民地主義的発想に基づく中央の政策が必ずしも常に所期の成果を挙げ得た訳ではない。中央の意図に関わらず、地方社会は独自の利害関係に基づき選択的に各政策に対応する。地方社会は中央の展開する論理を吸収し、それを逆手に取る形で自らの利益貫徹を図る戦略すら示していた。

その典型例が、第六章の主題である、教育政策とそれに対する地方社会の反応とであろう。ハミト期の「国民」形成における公教育の重要性について贅言する必要はないであろうし、教育を通じた現地民の「ギリシア化」が、所謂「マケドニア問題」におけるギリシア側の主要な戦略だったことも周知であろう。従来この二つの問題が論じられるに当たって、現地アルバニア人は単なる政策対象として描かれるのみであったが、ここで著者は極めて説得的に、教育の効用を理解する現地アルバニア人は積極的にこの双方の学校誘致に動いていたこと、しかしそれは必ずしも彼らがこれらの学校が発するイデオロギーと同一化していたことを意味する訳ではなく、彼らは自らの地元利益に沿う限りで、双方の発する言説に迎合する姿勢を示していたに過ぎな

いことを明らかにする。

以上から、あたかも国民国家樹立が当初より自明の目標だったかの如くに論じがちな通俗的なバルカン史理解が誤りであることも、また帝国中央の発想にのみ立脚する帝国論が浅薄なものたらざるを得ないことも明らかに理解される。アルバニア、イエメン両地域の実態（ひいては末期オスマン社会の実態）とは決して帝国中央の発想が単線的・一方的に実現した過程でもなければ、帝国の「圧制」と民族主義との妥協なき対立にのみ彩られている訳でもない。それは、そこで活動する個々の行為主体が有する利害関係、それを踏まえ各行為主体が独自に示す言動の実像を理解した上でこそ論じられるべきものである。

このように、事例とする論点の多彩さとも相俟って、著者の主張は極めて説得力に富む。だが勿論、本書にも批判すべき点が全くない訳ではない。以下では本書が孕む問題点と思われるものをいくつか指摘していきたい。

第一に読者に不審の念を抱かせるのは、地方社会における行為主体の複数性、自律性を強調する著者が、帝国政府における行為主体の複数性には十分な注意を払っていない点であろう。著者自身も指摘するようにアルバニア人の多くが帝国中央の政策決定に関与していたが（pp. 29-30）、それに加え、各州の行政評議会、州議会を筆頭に、現地で政策遂行に当たる官吏に現地出身者が多かったことは改めて言うまでもない。つまり、中央地方の双方で帝国政府を「代表」する行為主体それ自体、帝国内部の各地方（あるいは「辺境」）出身者から構成されていたのであって、オスマン帝国の政策決定権者も、その決定内容を地方で遂行する人々も、共に決して一枚岩的な存在ではなかった。ところが、エリートや帝国中央による歴史叙述の独占に、そしてエリートや帝国中央にのみ注意を払う史観に反発する著者は、「サバルタン」的立場にある人々に関心を集中させる余り、逆に「国家」を実体視し、帝国政府内部の様々な行為主体の存在を看過して、「辺境」出身でありつつ国家内部で、国家を代表する立場で活動していた政治家、官僚たちの主体性を閉却してしまっているように思われる。

この点は第二の問題点、即ち、筆者が意図する「比較」の妥当性の問題とも関わる。1870-73年にオスマン帝国に再征服されたイエメンは（1532-1635年の第一次領有に次ぐ第二次領有）地理的にも政治的にも帝国の最周縁に位置した。当時のオスマン人の多くがイエメンは他の帝国領各地域とは異質な地であると見做しており、イエメンは植民地として統治されるべきであるという論が公にされることすら稀ではなかった。一方、青年トルコ運動の中核をアルバニア人が占めていたことに象徴されるように（pp. 31, 124-131）、アルバニア地域の動向は帝国中央の政情と常に連動していた。従って、アル

バニアが「辺境」であるとしても、その意味はイエメンが「辺境」であるという際の意味とは多少なりとも異なる筈であろう。

この点を念頭に置けば、「比較社会政治史」を表題に掲げる以上、アルバニア、イエメンの両地域が帝国の枠組み内部において有していた立場の違いを明らかにすることが求められよう。だが著者はこの作業を行っていない。このため、そもそも何故この両地域が比較されねばならないのか、という肝心の点が曖昧であり（何故別の地域ではなくこの両地域なのか？）、民族主義史観批判や「地方社会の主体性」への注目の必要性などといった主張が両地域に関して無関係に並べられているのみではないかという印象が残る。勿論、本書でイエメンに割かれているのは二章分に過ぎず、著者が本書は決して最終的結論を提示したものではないと再三述べていることに鑑みても（p. 8）、こうした批判は性急に過ぎるかもしれない。だがその題名にも拘らず、本書が充分な比較対照の作業をなし得ていないことはやはり遺憾とせざるを得ない。

というのも、以上に挙げた二つの問題点は実は、地方社会の主体性、自律性に着目する近年の研究の多くが孕む問題点でもあるからである。これらの研究の多くは所与の「地方」対「中央」という一対一関係の枠組みを前提しており、論じられている地域が帝国全体の枠組みの中でどのような位置付けにあり、その地域が帝国中央との間に結ぶ関係は帝国領内の他地域に比して如何なる特性を有していたのか、という点は考慮されないままに残される場合が多い。そしてこの「中央対地方」の関係が往々にして「トルコ対非トルコ」と混同されるため、当該地域の自律性を強調する研究の結論は、その元来の意図とは別に、「トルコ対非トルコ」の分断を超えたオスマン帝国全体の国家像を提出することができないままである。帝国内の異なる地域を同時に扱い、オスマン帝国という同一の枠組みの中でのその状況の異同を論じることこそ、こうした問題を解決するための有効な方法たり得よう。

最後にもう一つ批判すべき点を指摘しておきたい。それは本書の叙述対象が事実上ハミト期に限定されており、青年トルコ革命後の時期に関する通俗的見解に対しては著者が十分に批判的な眼差しを向けていないことである。

例えば青年トルコ革命後のアルバニア情勢について、著者は特に根拠を示すことのないままに、「1908年にモダニスト的で専制的な青年トルコ体制が登場するや、歴史的に自治的だった共同体に対する国家的暴力には顕著な増大が見られた（p. 99）」と述べてしまう。あたかも「青年トルコ」なる単一の実体が存在したかのような印象を与えるこうした言明は、「範疇の横暴」を批判する著者自身の主張に反するものであると言わざるを得ない。バルカン地域がオスマン帝国からアルバニアその他の国民国家並立体制へと変容する

最も決定的な時期の政情を、帝国内の各地域の「主体性」を尊重しつつ把握するためには、この時期の出来事を「青年トルコ」なる単一の行為主体の意志の産物と見做すことには慎重であるべきではなかっただろう。

オスマン帝国の事例を同時代の他の帝国との比較の俎上に載せることで帝国論をより豊かなものにするという著者の示した課題を果たすためには、中央に対する地方の自律性を指摘するだけでは充分ではない。そのためには各地方の行為主体が帝国政府の政策決定に如何なる影響を及ぼし、その遂行に如何なる形で関与していたかという側面を考察することも求められよう。オスマン帝国の統治システム、そして「オスマン後」へのその影響力をより良く理解するためにも、帝国中央の政策決定権者を「トルコ人」と同一視して「地方＝非トルコ」をそれに対置するのではなく、帝国内各地域の自律性が帝国という枠組み内部で如何に機能していたかに着目していく必要があるのではないだろうか。

註

- (1) 特に著者自身の引用する代表的業績として、Selim Deringil, *The Well-Protected Domains: Ideology and Legitimation of Power in the Ottoman Empire 1876-1909*, London: I.B.Tauris, 1998. を参照。

Isa Blumi, *Rethinking the Late Ottoman Empire: A Comparative Social and Political History of Albania and Yemen 1878-1918*, Istanbul: Isis, 2003, 211p.